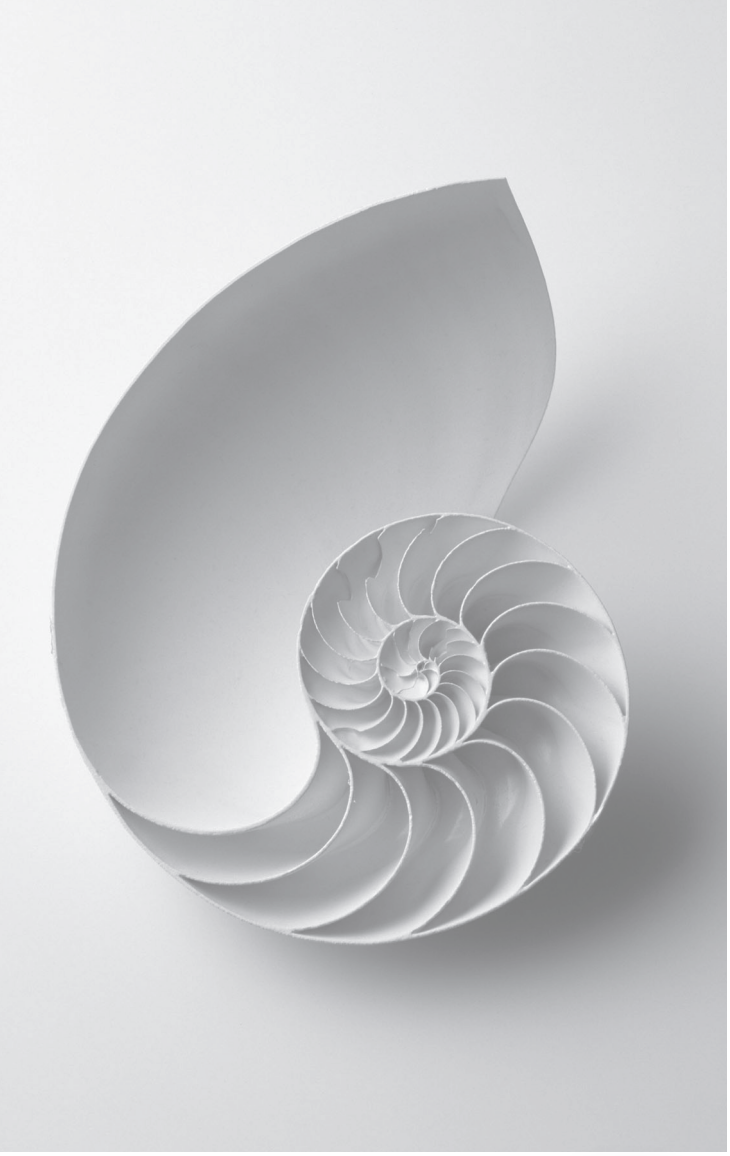
第 17 回

文窓賞優秀作品集



2023年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第 17 回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「弾け、ピンボール」

橋本　翔匠（国文学 4 回生）

佳 作

「変化と不変、その中の文学」

光野　麦穂（1 回生）

佳 作

「言葉が私を歩かせる」

中原　幸子（国文学 4 回生）

新人賞

「教養人の孤独」

清水　さやか（1 回生）

◎ **選考会**　2023 年 8 月 7 日

◎ **応募総数**　8 作品

◎ **選考委員**

長坂　一郎　研究科長（芸術学　教授）

白鳥　義彦　副研究科長（社会学　教授）

武藤　美也子　日高　健一　三宅　征彦

廣野　幸夫　　吉田　浩次　中川　伸子

中畑　寛之　　津田　薫　　梅村　麦生

西川　京子（選考委員長）

優秀賞

弾け、ピンボール

橋本　翔匠（かなる）（国文学４回生）

ピンボールという遊戯がある。傾斜した盤面で球を転がすと、球はピンにあたって様々な方向へ転がっていく。少し古いゲームセンターの一角などにあるそれを見ると、私は自身の大学生活と重ねずにはいられない。この数年も様々なピンに当たり続けるような生活だったからだ。大学生活は、はじめから巨大なピンにぶち当たっていた。

「コロナ禍で大変だったでしょう」。目上の人と話していて、そう言われることにも慣れてきた。2019年の暮れに始まり、そのウイルスが瞬く間に生活を変えてしまったことは説明する間でもないだろう。入学試験で大学を訪れたときからマスクをつけていた息苦しい記憶に始まり、現在に至るまでの大学生活。その大半が新型コロナウイルスの影響を受けている。意気揚々と春に独り暮らしを始めたものの、夏から次の春にかけては実家で過ごした１回生。同級生との関わりも当然、生まれることはなかった。2回生からは徐々に対面の講義が増えるも、情勢は不安定なまま。一度開催されたと思った対面講義が次の週にはオンライン。そんなことの繰り返しだった。

そんなこの数年間を象徴する単語をひとつ選ぶとすれば、「自粛」だろう。部屋に籠る。オンラインの画面上で他者と関わり合っても、何かが足りない。さながら狭い部屋のなか、ステーションに滞在する宇宙飛行士のような気持ちで日々積み重なっていく小さな違和感たちを、吐きだす宛てはどこにもなくなっていく。そのようなことは実際に思ったし、自粛期間にそんなイメージを抱く人も少なくはないだろう。しかし、私はこの数年間を後悔していないと言える。それゆえの出会いと成し遂げたことがたくさんあるからだ。

入学したその春、私は３つのサークルに入った。ひとつは作曲に関するもの、ひとつはボードゲームに関するもの、もうひとつは短歌に関するものである。どれにも興味があった。特に作曲に関しては大学から新しく始めたことだった。外に出られない日々が続くなか、部屋のなかで出来る趣味としてやってみたそれはとても面白く、確実に私の世界を変えた。作った楽曲がいろんな人に聴かれて感想をもらえたり、自分の創作がほかの人の創作の原動力になったりした。ひとりで作業していても、誰かに届くのだと思えば、ひとりではないような気分になれた。また、文章を書くことも好きだった。インターネットで日記を毎日つけて投稿するようになった。私の文章を読んでくれる人が少しずつ増え、何人かの人と会って話すこともあった。これらの創作活動は、確実に私の世界を広げてくれた。しかし、なにより大きかったのは神戸大学文芸研究会の存在だった。

既に３つのサークルに入っていた私だったが、もうひとつ所属したいと考えていたのは文芸作品を発表する場所だった。高校で文芸部に所属していた私は、大学でもその活動を継続したいと思っていた。そうして調べると、神戸大学には文芸に関するふたつのサークルがあることが

分かった。うちひとつのサークル、神戸大学文芸研究会というところは活動を休止しているという。気になった。もちろん活動しているもうひとつのサークルに入ることも悪くはない。しかし、大学生活でなにかひとつ大きなことを成し遂げたい、この状況なりに新しいことを始めてみたい、そんな思いがあった。

ところで私は推理小説が好きだ。推理小説を研究するサークルは、いくつかの大学に存在しており、関西での活動が活発だったりする。しかし神戸大学にはなく、私にはそれが悔しかった。自分で一から会を運営していくのであれば、そのような活動もできるかもしれない。これもひとつの動機となった。そうと決めれば始めるしかない。

最初の働きかけとして、課外活動を担当する窓口へ相談した。かつて研究会に関わっていた職員の方から情報をもらった。曰く、2020年度で部員が全員卒業し、休部状態になっているとのことだった。過去の活動をみると、10年以上は活動が続いてきた会であるとわかる。それを断絶させるなんて勿体ないことこの上ない。その灯を絶やしたくはなかった。しかし、あれこれ調べるとするべきことはあまりに多く、ひとりでは手に負えず成し遂げるのも難しそうだ。そんな思いを人に話したりした。すると、別のサークルの同級生が力になりたいと申し出てくれた。そこからは力を借りつつOBの方と連絡を取ったり、部室に残された引継ぎ資料から情報を集めたりする日々が続いた。

そうして準備を重ね、活動を始めたのは2021年。2回生の秋ごろだった。まず訪れた関門は、部員を集めること。現状の部員は2人。対面での新歓活動も制限された状態で頼れるのは、これもまたオンラインでの広報だった。140文字に収まる短い小説を投稿したり、自由な見学を歓迎したり、積極的に情報を発信していく。次第に部員が集まり、活動が本格的に始まっていった。しかし全てはオンラインでの活動。zoomを用いた読書会、情報の共有。慣れない部長として、精一杯のことを務めた。

活動が始まって約1年。神戸大学での大きな催し、六甲祭に出展する話が持ち上がった。1年に1度、校外にも活動をアピールできる機会である。会内で出展に反対する人はいなかった。会誌を作って配ることを決めた。私が高校でも文章を書いていたことは前述した通りだが、中心となって本を作るなんて初めてで、作品が集まるかどうかも分からない。そんな不安をよそに、詩や小説など部員たちからは多数の作品が集まった。これらの作品たちを無駄には出来ない。協力しながら必死に編集し、無事に本は形となった。「清流　第四十四号」。数年ぶりの部誌が、自分達の手で無事に完成した。そうして迎えた六甲祭当日、そこは、はじめて部員たちが顔を合わせた場所でもあった。画面越しの姿しか知らなかった会員と、初めて顔を合わせる感慨があった。しかしいつまでもそれに浸るわけにもいかず、六甲祭は始まった。展示を行う教室が広いことを知った時は不安だったが、休憩スペースとして部誌や部員のおすすめする本を読んでもらう、という発想の転換が功を奏した。部室に入れず、準備していた装飾が手に入らないというトラブルもあったが、なんとか乗り越えた。部誌は無料で頒布したこともあり、すぐになくなってしまった。読んだ人から感想をもらえることもあった。

間違いなく、再興した文芸研究会はその爪痕を残せたのだ。自分が立ち上げたものがこうして形となり、作品が知らない人に伝わる。自分の作品だけでなく、他の人の作品を届ける場所にもなっている。自分が普段読んでいる文芸作品も、こうして広がっていくのだと分かった。たしかに当初志していた推理小説を研究するような活動にはなっていない。だけどこの経験は何物にも代えがたいうれしさがあった。

そうして2023年春。緩和してきた制限や新入生が入る時期になり、会員は二十数名になった。そのなかで私たちはふたたびの六甲祭を目指し、活動を続けている。そんななかで、ひとつの企画を持ちかけられた。図書館と連携した企画だった。地域の若者との連携をさかんに行っている、新長田図書館の館長さんからの提案だった。会誌の寄贈、会員のおすすめ本を紹介、棚に置いてもらう企画を行いたいとのことだった。正直なところ、私も、会の運営をしている同級生も4回生で忙しい時期である。自分の手に負えるか心配で、始めは面倒に思っていた。しかし館長さんの熱意を伺ったり企画を進行していくにつれ、地域に貢献するまで、この会が注目して貰えたのだと分かった。この活動をやっていてよかったと思えた。ひとりで始めたことが、こうして地域への貢献まで繋がったのだ。

元を辿ると、神戸大学文芸研究会が活動を再開したのは自分の行動がきっかけだった。もし自粛期間がなければ、このようなことになっていただろうか、と問うてみたい。そうはならなかったかもしれない。対面で開催された新歓祭に参加して、全く異なる活動に参加していたかもしれない。家にいる時間が少なくなり、文芸研究会のことを調べるような時間もなかったかもしれない。これは仮定の話であるし、些細な違いかもしれない。けれども、人生がそんな小さなことを重ねて変わっていくことは事実だ。その様子はさながらピンボールだ。ひとつの釘に当たり、右に行くのか左に行くのか、それを積み重ねるだけで、どの穴に入るか全く異なってくる。その「小さなこと」、ピンボールのピンのひとつに、この数年の自粛期間があったことは変わりない。

この数年がなければ文章を書いたり、作曲する趣味に熱中することもなかったと思う。世の中に苦しい側面があったことは事実だ。私も家族に会うことが叶わなかったり、うまく行かないこともあった。しかし、この数年間を肯定してみる視点があることも忘れずにいたい。家に籠って行う趣味によって私は人生が豊かになったと思っているし、胸を張ってその過ごし方を肯定できる。弾かれて飛び出した球が描いた軌道は、いびつであっても真っすぐな線の集合だ。それは美しい。これまでを肯定したように、これからのことも肯定していきたい。人生は選択の連続だ、という。どんな状況であっても、自らが踏み出してみることで変わることがある。ボールとなってピンに当たりに行って、まだ見ぬ穴へ飛び込んで得られるものは、必ずある。

いまの私に立ち返ろう。私はいま4回生であるが、来年度に留年することになっている。原因はわたしが創作活動と学業を両立できなかったからだ。そのため、いまは来年度の就職活動に向けて取り組みを続けている。この先には卒業論文も、教育実習も、たくさんのピンが待ち受けている。1年後の自分がどうなっているのか、自分でも分からなくて苦しい。増えてしまった1年を有意義に過ごすべきだとは思う。しかし、先行きの見えない状態で何かへ踏み出すのには勇気がいる。そんな時こそ、この数年を思い出したい。どんな状況でも自分で踏み出してみること、そうしていつかその頃を肯定できるようになること。過去の自分を肯定することは、未来の自分を信頼する力にもなりうる。これからの課題が多いということは、より広くてどう転ぶか分からないピンがたくさんある、面白い盤面へ飛び込んでいくことだ。私の指先は、そっとボールを弾き出している。

佳　作

変化と不変、その中の文学

光野（こうの）　麦穂（むぎほ）（1 回生）

誰も予想しなかったコロナウイルスの流行により私たちの当たり前の生活は急な変化をせまられた。様々な事業で縮小が余儀なくされ、失われたものも多くある。その一方で新たな取り組みも多く生まれた。今までも私たちの生活は少しずつ変わっていたのかもしれない。しかし、コロナパンデミックにより全員が社会の急激な変化を目の当たりにした。改めて変わるべきもの、変わらざるべきものが見えてきたのではないだろうか。3 年が経過し、変化した社会が当たり前になりつつある今、この時代を生きる私たちが考えるべきことは何だろうか_____

大それたテーマを設定してしまったが、私たちは身近なところで大きな変化を経験してきた。ひとつはデジタル化。高校生、中学生はもちろん小学生までひとり一台パソコンを持っているだなんて私が中学生のころはまったく考えもしなかった。あいにく私の高校は少々古臭いところがあったので私は大学生になってからパソコンを手に入れた。だから中学生の妹の方がよっぽどパソコンを使い慣れているように思える。この前パワーポイントで作ったプレゼンの練習台になった時には、あまりの出来に当時の自分と比べて、恐れおののいた。中学生の私はタイピングで精一杯だろう。そう考えると、今から数年後には自分よりずっとレベルの高い下の世代と仕事をしているのだと思うと少し不安を感じる。こんな風にコロナ禍を通して、私は新しい時代の訪れをじりじりと体感していたのだった。

それと同時に私は変化した時代への希望も見出していた。それはグローバル化である。または「世界の一体化」の方が私の思いをダイレクトに伝えてくれているような気がする。動画配信サービスや電子書籍が急速に普及して、コンテンツも需要に答えるように急増し、今までだったら出会うことのなかったであろう数々の作品に出会うことができた。それに加えて zoom の普及である。オンライン授業や、説明会、面接などで当たり前のように用いられるようになり、私もミーティングや授業などでかなり頻繁に使っている。その中でも私が特に印象に残っているのが、アメリカの大学生とのオンラインディスカッションであった。高校のプログラムで元々留学に参加させてもらう予定だったのだが、渡米がかなわず、代わりに用意していただいた機会だった。もちろん留学はしたかったのだが、海を隔てた大学生と日本にいながら、こんな簡単にリアルタイムで話すことができるのかと改めて技術の進歩に感動していた。

そんなデジタル化、グローバル化が進んでいる今、私は神戸大学文学部に入学した。近年新たな社会のニーズに応えるため、多くの大学で新しい学部が創設されている。グローバルやデータサイエンス、メディアなど様々なかっこ良さそうな言葉が組み合わされた名前の学部と比べると、文学部は「文」一文字であり、なんと簡潔なことだろうと思う。そして、どちらかと言えば文学部は先ほど述べたような言葉と対極にあるように思える。文学部を志望するにあたり、私も多少なりとも反対を受け、「文学部　就職先　ない」などと検索したこともある。私はもともと経営学部志望だったのだが、勉強を進めるうちにせっかく 4 年間学ぶ機会が得られるなら

自分の興味のある分野を学びたい、と思って出願先を直前で変えたのだった。反対を押し切ってまで私が文学部に入学したのにはそれ相応のわけがある。文学を学べば人生が豊かになる、そう私は信じている。ただ単に４年間思い切り、好きな文学に触れ、自分の考えをまとめておきたいと思っただけなのかもしれないが。

また私は文学部とは人を学ぶ学部だと思っている。文学も歴史も哲学をはじめとし、社会学、心理学などでも人が今まで紡いできたものや人の在り方を考える。そういえば、進路選択の時に背中を押してくれた高校の担任の先生に「光野さんとＡさんってどこか似ています。面白いです。」と言われたことがある。その先生は生徒思いで小一時間話続けられるようなおしゃべりな人であった。「どういうことですか。」私はＡさんとは同じクラスだったが、その時はまだほとんど話したことがなかった。先生によるとＡさんは「人間って面白いですよね。」と本当に面白そうに言ったらしかった。そしてＡさんも私同様、現在文学部に通っていて、今さらながらＡさんには文学部がぴったりであったなと勝手に思っているのであった。かくいう私も神戸大学の文学部で充実した日々を送っている。毎日レポートに追われながらも、自分の好きな授業を受けられるのはとても楽しく、文学部にしてよかったと思っている。

母の影響で小さいころから本が好きで、ついには文学部に入学までしてしまった私だが、ここ数年間は全く本を読まない生活を送った。部活に勉強、遊び、日々に追われて、受験が終わったら好きな本を読もう、と唱え続けた。しかしいざ図書館に訪れ、本の目の前に立った時、私は本の選び方を忘れてしまっていた。前後左右に立ちはだかる本の壁に手を出すこともできず、しばらく呆然と立ち尽くしていた。ようやく好きな本が読める、ワクワクして本棚を通り過ぎていた時の気持ちがしゅんと沈んでしまった。なにしろ読みたい本がないのだ。私はいつからか役に立つ本を探すようになってしまっていた。そうじゃないだろう。これが今回この文章を書こうと思った出発点だ。

小学校、中学校では半強制的に本を読まされていたが、高校生になると読書をする人が急激に減った。私の周りにもきっと、これから先もう本を読むことがない人が山ほどいるのだろうと思う。忙しいとはいえ、時間はあるはずなのに常にスマホを触って過ごしている人が多い。確かにスマホはすごく軽くて小さいのに、それさえあれば友達のことだけではなく、世界中で今何が起こっているかわかる。加えて、膨大な情報にアクセスしたり、ゲームもできたりする。また、近年電子書籍も当たり前に利用されるようになっている。しかしそれは本そのものがあってこそだと思う。突然本のデータが配信されなくなる可能性を考えるとやっぱり大切な本は手に置いておきたい。

私は文学を好きな人間として、どんなにデジタル化が進んでも、本はやはり変わらずに残っていてほしい。本との出会いは一期一会だ。たまたま惹かれた本を手に取って読むことが読書の一番の楽しみだと思う。書店では本が平積みされ、目の前いっぱいに本の表紙が並ぶ。色とりどりの美しいもの、シンプルなもの、本のタイトルが合わさって、物語への想像を膨らませる。本屋に入った時のあの高揚感が好きだ。期待に胸を膨らませながら手に取った時の本の重み、ページをパラパラとめくるときの紙の層の感触もまたいい。

また、本は人と人の出会いを繋いでくれる。私は図書館というと一人の友達を思い出す。小、中学生の頃、私は友達に誘われても本が読み終わった日は必ず図書室に向かっていた。一人で行くことも多かったのだが、運よく本好きの友達ができてそれから暇さえあれば彼女と図書室

に行っていた。普段は「どっちでもいいよ」と優柔不断なことを言う彼女がこの時ばかりは文庫本の裏のあらすじを見せながら、強く本を勧めてきた。私好みではない本を薦められた時は疑いつつも一応読むのだが、いつもすごくよかった、ありがとうと感謝することになるのであった。彼女は読んだ後スカッとするようなミステリー小説よりも、心がぽかぽかと温まるような小説が好きだった。主人公は少しひねくれていたり、寂しがり屋だったり、気配り屋だったり、彼女の内面が表れているようだと思った。私は、好きな本はその人の内側を表していると思う。以前会った方から「この作家さんは私の言語化できないような気持ちを表現してくれるから好きなんだ。」という話を聞いた。なるほど、私も自分とは全く別の世界にいるようで私と同じように悩む主人公が好きだ。小説は論文と違って人の気持ちが主役として描かれている。そう考えると、自分と気が合う人と出会うのは難しいけど、本で繋がって出会えた人とは自然と内面も似ているのではないかと思えてくる。もし文章を書くことで誰かの共感を得られたらすごく嬉しいとだろうと時々考えて、小説家に憧れたりしている。そうでなくともただ自分の好きな本を通じて仲良くなれた人はどこか波長があって特別だと思う。

入学してから何人もの先生が読書や、文学を学ぶ意義についてお話してくださった。先生それぞれの考えを聞きながら自分が４年間何を学びたいのか考えるいい機会だった。文学とは他の学門と比べると具体的にどのように社会の役に立つのかわからないと言われがちである。私にもわからない。しかし、文学は単なる楽しみや絵空事ではなく、学ぶ意味があるものだと思う。管啓次郎は『コヨーテ読書』で読書について「自分がいるごく限定された小さな場所と、あらゆる遠い場所とを、無規則に斜線で結びつけるという運動ではないかと思う。」と述べている。私たち全員が今までに紫式部の『源氏物語』、夏目漱石の『こころ』、ヘルマンヘッセの『少年の日の思い出』、白居易の『長恨歌』など千年以上前の物語や、様々な国の物語を読んできた。十数年しか生きていない日本の小さな教室にいる私が今までに経験したことがない、またはこれからも経験することのないだろうことを、本を読むことを通じて知ることができるのだ。知ったところで、その瞬間から何かが変わることは少ないのかもしれない。しかし、本を読み続けると偶然自分を変える本に出会えるかもしれない。そうでなくても、私たちは吸収したものから自分の考えを形作るのだ。また驚くべきことに、時代も国も違うのに私たちはそこに登場する人物の心情を読み取ることができる。自分とは全く異なる人の内側に触れて、想像し共感する力は現代でこそ求められている力なのではないだろうか。すでに大学生になり初めての夏休みを迎えようとしている。AI や最新技術がなんでもできるような時代に、人間にしかできないことはなんだろう。私は共感する力や、物事の本質を見抜く力だと思う。これからの大学生活で世界中の様々な本を読み、自分の中に多様な考えやことばを取り込みたい。そして豊富な想像力と表現力をもって社会の役に立ちたい。

佳　作

言葉が私を歩かせる

中原　幸子（国文学４回生）

「君にとって、生きるっていうのは、どういうこと？」
…
「生きるっていうのはね」

住野よる作『君の膵臓をたべたい』で、膵臓の病に侵され余命宣告をされた山内桜良は「僕」の問いにこう答える。

「誰かを認める、誰かを好きになる、誰かを嫌いになる、誰かと一緒にいて楽しい、誰かと一緒にいて鬱陶しい、誰かと手を繋ぐ、誰かとハグをする、誰かとすれ違う。それが、生きる。自分たった一人じゃ、自分がいるって分からない。誰かを好きなのに誰かを嫌いな私、誰かと一緒にいて楽しいのに誰かと一緒にいて鬱陶しいと思う私、そういう人と私の関係が、他の人じゃない、私が生きてるってことだと思う。私の心があるのは、皆がいるから、私の体があるのは、皆が触ってくれるから。そうして形成された私は、今、生きている。…」

この場面が私の中に強く残ったのは、私の思う「生きる」と彼女のそれがいくらかの共通部分を持っていて、彼女がそれを「言葉に」してくれたからだと思う。強く残ったインパクトが故に、この場面がこの小説のクライマックスである、と勝手に考えてしまうほどだ。これまで言語化なんてしたことはなかった私の「生きる」が形を帯びた。

私に爪痕を残したそんな彼女は、私の人生選択においても登場してしまった。

教員採用試験を控えて、勉強のあれこれや面接、教育実習。重なる不安の中でも私を悩ませたのは、「どこで教師になるか」だった。検討を重ねても、地元か神戸かの２択の決心がなかなかつかない。

田舎の中でも田舎の地元で、大山を背中に田んぼの間を自転車で学校に駆け、眠気覚ましに熱唱したって誰にも迷惑はかからない。下校の道では夕日が沈み、夕日でできる影を私が独り占めできる。この解放感が大好きで、私が自負する少ない自分の長所もこの環境に形成された、と思っている。近所の人は私を知ってくれていて、「村」はひとつのコミュニティとして、私たちの生活に存在している。

さて大学になって出てきた神戸は、驚くほどいろいろなことが、違った。時刻表に合わせて予定を立てなくても10分もたたず電車は私を迎えに来てくれて、ひしめき合う建物の景観も、少し場所が変われば雰囲気を変えるのが面白い。中心部に出て数えきれない人の中に身を落としても、知り合いに出会うことなんてめったにない。上に登れば街が詰まった景色が拝める。この中に私みたいに進む先に困っているような人、悩んでいる人はきっと何人もいて、「生活」が凝縮された高台からの景色は私をわくわくさせた。

そんな場所でのそれぞれの生活。お金は？家は？家庭を持ったら？教育理念、試験概要、郷愁、親孝行…。あらゆる条件で考えても、それぞれに長所と短所が主張してくる。自分の中の天使と悪魔ならぬ、地元と神戸がキャラクターとなって出てきそうだった。

場所は決まらぬまま購入した試験用の参考書の整理の途中で、久しぶりに『君の膵臓をたべたい』に会った。「僕」と山内桜良の軽快なやりとりに浸りたくて、もう一度読み始める。

「きっと、誰かと心を通わせること。そのものを指して、生きるって言うんだよ。」

たどり着いた私的クライマックス。勝手に私の中で生成された山内桜良の声で、彼女が「生きる」の答えを話し始める。彼女が続けた言葉を読んで感じたものは、初読の時と変わらない。やっぱりこれは私にとっての「生きる」とも重なっている。

読み終わり現実に戻って、直面する問題に引き戻される。消えない本の余韻の中で、何度も繰り返した問いをもう一度考える。彼女によって形を帯びた私にとっての「生きる」を、今後「生きる」場所の選択に使ってみようか。地元と神戸、それぞれで出会った人、これから出会うであろう人、出会える可能性のある人、そこで私を支えてくれる人。様々な条件に悩まされたが、私を生かしてくれる「人」を条件に考えてみる。それなら、こっちで生きたいかもしれない。そういえばこっちの教育理念は、まさしく的を射ている。なにかが腑に落ちて、自分なりに納得がいって、やっと決心がついた。

――よし、こっちで、教師になる。

出した答えが、出し方が、正しいのかは分からない。この答えに決めた経緯を誰かに話しても納得なんてしてもらえないかもしれない。しかし、少なくとも私の中では、自分の答えに整理がついた。停滞していた私の悩みに着地点を与えたのは、私の「生きる」を言語化した山内桜良の「言葉」だった。あえて考えることもないままなんとなく私の中に感覚としてあった私の「生きる」が、この言葉に出会い輪郭を帯びた。それが人生の岐路にも影響してしまったらしい。

高校時代に一番好きだった倫理の授業の中で、ウィトゲンシュタインの名言が私を大きく揺らした。

―「語りえぬものについては沈黙しなければならない」

人間の思考の限界は言語の限界であり、それを超えた神、倫理、価値は言語の次元で説明不可能なレベルにあり、「語ることはできない」のである。言葉により、思考が固まる。

この経験は、私の「生きる」を説明した彼女に限らず、日常のあらゆる場面で起こっている気がする。

そのことを大きく感じたのは、ほんのつい最近だ。アルバイト先の日本料理店で、恋愛観を談笑しあっているとき言われた言葉だ。

―「さっちゃんは直感で生きる気楽なタイプってより、本音と建前分けるタイプよね」

気楽には生きていなさそうに見えるのか、という反論は度外視して、「本音と建前を分けるタイプ」という私への評価は、私が自分自身で自覚している性格を、とても端的に、うまく言い表していると感じた。私の発言、発信が受け取り手にどう響き、私のイメージ像にどのように影響するのか、一度考えてから表に出す。「なりたい自分」と「ほんとうの自分」で葛藤するような経験が私に多くあるのも、「本音と建前」を完全に分けるタイプだからだ。

それが深い実感を伴ったのは、私の専攻について考えた時だ。「なぜ日記文学や随筆に興味があるのか」と聞かれ、自分のことなのに「なぜだろう」と思っていた。「なんとなく」「何かに惹かれて」などと流していたこの問いの答えも、「本音と建前」が大きく関係している、と思った。「日記」というと経験した事実を綴るという共通解釈が持たれる文章の種類だが、平安時

代の日記には多くの「虚構」が指摘される。読み手にどのような自分を見せたくて、何を伝えたくて自分の人生の中からエピソードを取捨選択しているのか、また脚色を施すのか。「建前」の自分をどのように作っているのか。それともすべてが「本音」なのか。私が対外向けに日記を記すとして、必ず行うであろう「建前」としての私の再構築を、平安の女性たちはいかに行っているのだろうか。その興味が、日記文学に傾倒する理由であろう。

なにかに惹かれて日記や随筆を扱っていたはずだが、そのなにかが分からずにいた。それが「本音と建前」を自分に当てはめて初めて、形となった。

今回のように自らの感覚とマッチした「言葉」に限らず、言葉が何かを形作るこの体験は、気づかなくともきっと日常の「言葉」の中にたくさん転がっている。その内容は、全く首肯できない内容、一度も自分の中に芽生えなかった領域の内容など、その種類は様々だ。文字を、文章を読むことによるそんな力は、自覚しているものだけにとどまらず、無意識に私の中の感覚に形を加えてきたと思う。そんな言葉は良い武器にもなり、時に人を傷つける武器ともなる。それでも、その影響力のベクトルの向きの多様さが、「言葉」の力の広さ、可能性を示していると私は思う。

彼女の、山内桜良の「言葉」におされて決めた場所で、国語教師となる。「言葉」の力を国語教師となって「言葉」を使って伝えていく。今思い描くそんな未来のどこかでもしかしたら、彼女を超える、私にとっての「生きる」をよりよく表す「言葉」に出会えるかもしれない。

――うわはははっ

彼女の特徴的な笑い声が私の背中を押す。

だったら探しに出かけてみよう。未来に向かって歩き出す。

言葉が私を、歩かせる。

参考文献

・住野よる『君の膵臓をたべたい』（双葉社、2017 年）

新人賞

教養人の孤独

清水　さやか（1回生）

「これはいわばRPGゲームで例えると木の剣のようなものです。」

塾の授業中に教師が発した何気ない一言は、私には不可解なものとして理解された。私はゲームをほとんどしたことがない。教育熱心な親を持つ人なら誰しも、「ゲームなんてしないで勉強しなさい」と言われた経験があるだろう。誤解がないように言っておくと、私はゲームを禁止した親を非難するつもりはない。しかし一方で、ゲームの話題を理解できないことは確かだ。友人間での会話の中だけならまだよい。だが、教育の中にもゲームの話題が入り込んでしまうと、その単元の理解が浅いものになってしまう。一昔前はゲームや漫画は子どもを勉強から遠ざけ、堕落させる中身のない娯楽でしかないと思われていた。しかし皮肉なことに、勉強に集中させるために禁止したことが、逆に勉強の妨げとなってしまったのだ。もはやゲームは、勉強と対極にあるものではない。フランスの芸術順序では漫画が第9芸術とされるなど、現代においてゲームや漫画といった娯楽の立ち位置は変化している。無駄な娯楽とみなされていた時代は過ぎ去り、今やそれらは最低限知っておくべき教養のひとつになったといえるだろう。もちろん、教養と聞くとまず思い浮かべるのはクラシック音楽や著名な文学作品のような、伝統的で長い年月を経ても変わらず人口に膾炙してきた文化芸術だ。一方でゲームや漫画が教養の枠組みに加えられたように、教養のあり方は時代とともに変化している。

では教養とは何なのか。思うに、教養とは共通認識として切り貼り可能な記号だと思う。文学入門の授業で、ハムレットの「To be, or Not to be」という有名なセリフがあらゆる作品や、レストランの看板にまで加工され、パロディ化されて流布していると教わった。当然、これらのパロディはハムレットのこのセリフを知っていることが前提にある。このセリフを知っておりパロディを楽しめることこそが、その人が教養人であることを示している。ハムレットのこのセリフは教養人の間の共通認識として、加工可能な記号として、すなわち教養として存在しているのだ。同様に考えると、冒頭に述べたゲームの例えや、テレビなどでよく見かける漫画のキャラクターになぞらえたコメントは教養的な営みといえる。特定のゲームや漫画を知っているという共通認識の上で、記号化されたキャラクターやストーリーを加工することによって自身の主張を理解させる。これはハムレットのそれと何ら変わらない。教養人によるこのような営みが、漫画やゲームにまで教養の枠組みを広げたともいえるだろう。

では教養人とはどのような人のことを指すのだろうか？フランシス・ベーコンの残した言葉にそのヒントを見出すことができる。

「読むことは充実した人間を作り、話すことは機敏な人間を作り、書くことは正確な人間を作る」

この言葉に示される充実し、機敏で、正確な人間は教養人のロールモデルのひとつだと考える。では充実した人間とは、機敏な人間とは、正確な人間とは何であろうか。ベーコンの示す人間のあり方について、一つずつ考えたい。

「あすの晩、君があの操縦士に危険な出発を命じなければならないような事態が起こるやもしれない。そのとき、彼は君に服従する必要の

ある人間だ（略）部下の者を愛したまえ、ただそれと彼らに知らさずに愛したまえ」/ サン・テグジュペリ『夜間飛行』より

充実した人間について考えるとき、文学入門の授業で語られた言葉を思い出す。

「文学研究の醍醐味の一つは、複雑な現実を複雑なまま理解する力が身に付くことだ。」

一般に、厳しい上司は悪役、そこで働く部下は正義として二項対立的に描かれることが多い。しかし「夜間飛行」では上司の苦悩が多く描かれている。円滑な業務のために、部下の安全のために、上司には上司の正義がある。現実は二項対立でまとめ切れるほど単純ではない。よくある物語のように上司を悪者にし、単純に支配 / 被支配の関係で現実を処理してしまうのは簡単なことだ。しかし上司の正義を理解し、二項対立では捉えきれない関係性をそのまま受け入れることが複雑な現実を理解する鍵だ。充実した感性と深い理解力がなければ、そのようなことはできない。読むことによって身に付くこの力を持っていることが、充実した人間であることだと考える。

ベーコンは先に述べた言葉の中で、「機敏」と訳されている部分に ”ready” という言葉を用いていた。機敏であるという意味の他に準備ができているというような意味を持つこの語を、なぜ使用したのだろうか。私は、話すことは未来に対して準備することだからだと考えている。カフカの「変身」を読んだとき、会話という観点で主人公グレゴールとその家族との対比が印象的だった。「『これからどうなるんだろう』とグレゴールは暗闇の中を見まわして自問した」とあるように、グレゴールはその醜い見た目から家族と話すことを遮断され、ひたすらに自問している。一方で、彼の家族はグレゴールについて話し合うことができ、未来に向けて準備をすることができる。この物語においてグレゴールが人と話すことができなかったことが、彼の悲劇的な結末に寄与していることはいうまでもない。他者の意見に耳を傾け、問題解決のために意見を持ち寄り議論する。経験や他者の意見を基にして、準備された道筋で機敏に問題解決のために行動する。未来に向けて行動するとき、グレゴールの家族のように話をすることで ready man となることができるのだ。

多様性を尊重しよう、とよく言われる。相手に偏見を持たず、相手の主張や文化的背景に配慮する行為は、正しい。書くという行為においては、なおさらその正しさが求められるだろう。書くことは、永遠を手にすることだ。書いたものは自分が死んだ後も永遠に残るため、時間、場所といったあらゆる境界を越えて読まれることを想定し、言葉を選ばなければならない。ベーコンは言葉を選ぶその営みが、人間を正確にすると期待しているのだろう。私は正確な人間になることを望む一方で、この言葉を選ぶ営みを好きになれないでいる。

中学生のとき、ふと四字熟語を使って状況を説明したことがある。目の前にある状況にその言葉がそれ以外の言葉で言い表せないほどぴったりと合っていたからだ。しかし私の説明をクラスメイトは誰一人として理解できなかった。私の通っていた中学校はお世辞にも優秀な生徒が集まる学校ではなかったので、誰もその四字熟語を知らなかったのだ。それ以降、何を言っているのか分からないと怪訝な顔をされるのが怖くて、中学時代は状況に完全に一致した言葉を見つけたとしても、わざわざ若者言葉に言い換えて発言していた。相手に合わせ、言葉を選ぶ営みは相手を慮る美しい営みに見えるのかもしれない。どの集団に所属してきたのかによって、個人が持ちうる知識は大きく異なる。多様なバックグラウンドと知識をもつ他者を尊重し、言葉を選び、最大限配慮して接する。多様性が叫ばれる現代において、そのような配慮の必要性はますます高まっていくだろう。しかし

あるがままの世界をあるがままに伝えることができるにも関わらず、それができないことは私にとっては苦痛だ。いっそ何も知らなければこのような苦痛な思いをせずにすむのに。

ここまで、教養は人間が身に付けるべき素晴らしいものだという前提で論を展開していた。しかし何かを知るということは、知らなかった時の世界を捨てるということであり、誰も知らない何かを知るということは、孤独になるということだ。様々な属性、集団で分けられる社会において、知識を身に付けるということは自らの手で集団から自分を排除することを意味する。表面的な他者の尊重をうたう多様性の社会で、自分のもつ知識を尊重され、配慮されたところで孤独が消えるわけではない。人々は幸福にはなれず、ただ孤独が深まるだけだ。知識を共有できる人がいなければ、中学時代の私のように周囲の人間に合わせながら孤独に生きていくしかない。それでも人間は知識を身に付け、教養人になるべきなのだろうか？

私は教養人の端くれとして、それでも知識を身に付けるべきだと言いたい。同じ知識を共有することは、無上の喜びを生む。極論を言えば、学ぶ意味とはその喜びを経験するためにすぎないとさえ考えている。我々は、加工可能な記号である教養を共通認識として共有し、パロディを楽しむためだけに知識を身に付けるのだ。もちろんパロディを楽しめなくても生活できる。ゲームや漫画と同様、無駄な娯楽にすぎないと言う人もいるだろう。しかしその知識は人生を豊かにする。たとえある集団で孤独を感じることになっても、同じ知識を共有する人が地球のどこかにいて、パロディを発信すればそれを楽しむことができる。ヤスパース的な表現でいうと、特定の集団内での孤独という限界状況に対し、全世界的な知識の共有という実存的交わりを得ること。これは教養人の特権だ。読み、話し、書くことはこの実存的交わりに大いに貢献するだろう。教養人たるためによく読み、よく話し、よく書くこと。それによって知識を共有し、実存的交わりを得ること。この営みによって知識による孤独や苦痛が和らぎ、豊かな人生を送ることができるのだ。幸運にも、神戸大学文学部には教養人が多く存在する。彼らと共に読んだり話したり書いたりするなかで知識を共有し、実存的交わりを得て、豊かな大学生活を送りたいと思う。

「最高の孤独は、ひとりも親友がいないことだ。
親友がいなければ世界は荒野に過ぎない」

フランシス・ベーコン

参考文献

・サン・テグジュペリ著、堀口大學翻訳「夜間飛行」新潮社、1956・2

・フランツ・カフカ著、多和田葉子編、訳「カフカ」より「変身」集英社、2015.10

発 行

2023年10月30日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
https://www.bunsokai.com/（文窓会）
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/（神戸大学文学部）